

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

征服とタラスコ王国：
16世紀ミチョアカンの先住民貴族の抗争に見られる
エスニック集団の表出

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2021-03-29 キーワード (Ja): 征服, タラスコ王国, ウアクセチャ, ドン・ペドロ・クイニエランガリ, ナワ キーワード (En): 作成者: 林, 美智代 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007964

征服とタラスコ王国

— 16世紀ミチョアカンの先住民貴族の抗争に見られるエスニック集団の表出 —

林 美智代

要 旨

戦闘を回避してスペインに征服されたタラスコ王国は破壊されなかったために、かえって社会を構成していた様々なエスニック集団を温存することになった。征服から植民地初期の激動期において、君主が処刑されると、先スペイン期に王国に統合されていたはずの先住民貴族や彼らが帰属するエスニック集団が、権力の奪取や特権・権利の温存のために、王国成立以前にまで遡る各集団の歴史に依拠して、抗争や訴訟を展開した。スペイン支配が介在することによって惹起された複雑な利害関係を孕む問題に対し、先住民は独自の歴史意識と表現方法を用いて、地位や権利の正当性を訴えた。スペイン植民地期においてさえ、彼らはけっして均質的・受動的的存在ではなかったのである。

キーワード：征服、タラスコ王国、ウアクセチャ、ドン・ペドロ・クイニエランガリ、ナワ

はじめに

スペインによる先住民社会の征服は、メキシコではエルナン・コルテスとアステカのモクテスマに焦点が当てられ、スペインのアステカに対する絶対的優位とアステカの高度な統合的社会像が前提とされることで、征服から植民地初期にかけて、スペイン人征服者・支配者がその高度な組織力を効率的に利用する側面が強調される。そのため、先スペイン期の先住民社会が歴史的に孕む対立と利害の関係が等閑視され、スペイン征服後、先住民を受動的・均質的な存在として捉えることにつながっている。君主の絶対的支配が実現していたとしてもそれは短期間であって、スペインの征服という文明史的危機に遭遇して、先住民社会の様々な内在的矛盾が表出し増幅したと考えられる。先住民貴族は新しい支配者による外圧を受けて様々な反応をみせながら、一族としてもエスニック集団としても生き残りを賭けて、互いに協調するかと思えば、衝突を繰り返さねばならなかったのである。このような側面をみることで、征服を経て築かれた植民地社会における先住民が、受動的・均質的存在ではなく、能動的・非均質的存在であることが理解できる。

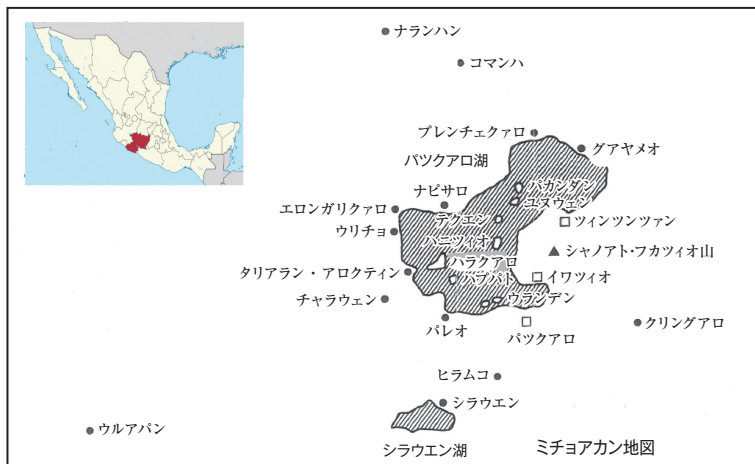
タラスコ王国は、スペイン人と戦闘を交えることなく彼らの支配を受容した社会だった。そ

のため、王国の成立過程に与る複数のエスニック集団が破壊されることなく存続し、征服と植民地支配を契機に、王国の本質特徴が表面化したのである。本稿では、征服から植民地初期の激動期に、かつて王国を支えたエスニシティの異なる先住民貴族が、スペイン支配下において一族の、あるいは帰属するエスニック集団の利害得失を賭してどのように抗争し、新たな社会の中で立ち位置を確保、あるいは喪失したのかについて明らかにする。

1. タラスコ王国の亀裂

1522年7月25日、アステカ崩壊から1年後、エルナン・コルテスの命に従い、腹心クリストバル・デ・オリは、200人のスペイン人とテスココの同盟軍5,000人を率いて、タラスコ王国の都ツインツァンに到着した。⁽¹⁾オリが4か月間、同地に滞在してミチョアカンの植民化を試みたが、失敗した。1523年7月からアントニオ・デ・カルバハルがミチョアカンに派遣され、1年の歳月をかけて同地方を調査した。コルテスはカルバハルの報告にもとづき、エンコミエンダ制のもと村を配下に割り当て、先住民の貢納受領権を認めた。

タラスコ君主タンガシヨアン・ツインツイチャ (1490-1530) はオリ軍との臨戦態勢を整えていた。しかし、重臣ドン・ペドロ・クイニエランガリは、前線基地タヒマロアが敵方の軍勢によってすでに破壊されたのを見て、ツインツァンからその地に至るまでの道程に潜伏させていた兵を次々と撤退させた。ドン・ペドロは、タンガシヨアンが長老で重臣である人物の進言に従い、戦況次第では、天界への入口とされていたパツクアロで自殺するのではないかと懸念していた。オリに捕らえられたドン・ペドロは征服者に問いただされ、タンガシヨアンは自殺したと言うと、スペイン軍の進軍の前触れ役として一足先にツインツァンに返された。途中、見張りにつけられた先住民の兵士をまいてパツクアロに赴き、長老の重臣に促されて入水自殺する寸前だった君主を思いとどまらせ、オリ軍を迎え入れるよう説得した。



父の先代君主スアングア（1470-1520）の治世下、1502年のコロンブスの第4回航海で上質の銅製の斧や鈴、ルツボを積んだメシーカ、あるいはマヤのものと思われる商船がホンジュラス周辺で捕縛された報は、銅の産地ミチョアカンのタラスコに何らかのルートで届いていたのではないかとされている。スアングアは1519年、トラスカラからスペイン人到来の報を受けていた。アステカ君主クアウテモクの援軍要請の使者がもたらした天然痘に罹患して、1520年死亡した。スアングアの後継者タンガショアンは、それまでにミチョアカンの支配領域に到来した何人かのスペイン人に関わる報やアステカの援軍要請も知っていたが、一度も敵軍の軍勢を直に見たことも、コルテスと相まみえたこともなかった。

オリ軍をツインツツァンに迎え入れたことで、コルテスが出した拝謁の命に従い、1524年の晩夏、タンガショアンはコヨアカンにコルテスを訪ねた。⁽²⁾ コルテスはタンガショアンを“hermano(兄弟)”と呼び、彼の領土にいるスペイン人に危害を加えないことと食糧を与えることに加えて、恩賞として諸村を配下に与えるので貢納を徴収しないよう告げた。タンガショアンはコルテスの命令に従うことを誓い、彼を再訪するであろうと述べて、ミチョアカンに帰還した。⁽³⁾ しかし、この会見を描写した *Relación de Michoacán*（以後、RMと略記）の言説は、タンガショアンが1524年の晩夏、コルテスに“tu señorío (貴君の領地)”と認められながら、王国全土に対する貢納受領権を剥奪されたことを説明している。この会見後、すぐにその現実に直面することになるが、その時、タンガショアンがコルテスの言葉の意味を理解していたのか。RMは、帰途上機嫌だったと記している。コルテスとの会見前に、拷問にかけられ足を焼かれた敗軍の将アステカ君主クアウテモクの姿を見せられた後、宿敵アステカから歓待されたことが上機嫌の理由だったのか、それとも殺されずにミチョアカンに戻ることが許されたので、アステカの轍を踏むことなく挽回の余地ありと内心ほくそ笑んでいたからか。

コルテスは、オリがミチョアカンから帰還後、ホンジュラス遠征に向かう途上でコルテスの政敵キューバ総督ディエゴ・ベラスケスに寝返った報を受けて、1524年10月、オリ討伐のためにホンジュラスへと出発した。1526年6月にメキシコ市に帰還するまでの間、コルテスの不在はメキシコ市だけでなく地方にも混乱をもたらした。王室役人の更迭劇が繰り返される中、1529年1月、第一次高等法院議長ヌニョ・デ・グスマンを筆頭とする役人とミチョアカンでグスマンの手先となって暗躍し、運搬を生業としながら王室役人に成り上がり、略奪の限りを尽すアントニ・デ・ゴドイが出揃った。グスマンは個人的にゴドイをミチョアカンへ遣わして、タンガショアン、および彼が即位時に義兄弟の契りを交わし、コルテスやオリとの交渉の矢面に立たされていた重臣ドン・ペドロ、その他タレカなる要人をメキシコ市に連行させた。グスマンがタンガショアンに金の供出を求めたので、ドン・ペドロはゴドイとともにその調達のため、ミチョアカンへ戻された。

1529年初頭に召喚されたタンガショアンはグスマンのもとにとどめ置かれ、5月に一時的に

ミチョアカンに帰ることを許されていた。グスマンと彼に判官に任ぜられてツインツツァンにいたゴドイとの1529年8月20日付往復書簡では、両者の間でタンガショアンとドン・ペドロの2人を一緒にメキシコ市へ行かせるかどうかについての意見交換が先の書簡で行われていたらしく、グスマンはタンガショアンの召喚を求めている。その口実として、スペイン国王ではなく、コルテスに臣従しなければならないとタンガショアンに言った張本人は誰なのかを陳述させるために召喚すると伝えよと指示している。この時期、現地にいたゴドイとスペイン人ゴンサロ・ロペスは、タンガショアンとドン・ペドロが、タンガショアンひとり陳述のためにグスマンのもとに行かせることを受け入れそうもないと察知して、グスマンに報告している。⁽⁴⁾その後、ゴンサロ・ロペスがメキシコ市まで彼らに随行した。日付が欠落しているが、ゴドイが書簡でゴンサロ・ロペスに対して、ドン・ペドロをツインツツァンへ戻すことを要請している。2人をメキシコ市にとどめ置いていても益がないことと、現地では物資調達が順調ではない事情を理由に挙げている。冒頭の文言から、ゴンサロ・ロペスはドン・ペドロが帰るのを望んでいないことを先にゴドイに書き送っていたことを窺い知ることができる。⁽⁵⁾タンガショアンとドン・ペドロが不在では、物資の調達もままならないことや、君主に劣らず、ドン・ペドロの利用価値が認められていたことを物語っている。

グスマンは1529年12月末、ミチョアカンに隣接するパヌコヘチメカ討伐のために、タンガショアンを伴いメキシコ市を出発し、1530年1月22日にツインツツァンに到着した。それまでに、自宅にタンガショアンを軟禁して財宝を執拗に迫るほかに、兵力増強のために8,000人の先住民を提供させていたが、彼らを奴隷としてキューバへ売ることが目的だった。⁽⁶⁾グスマンは、さらにタンガショアンがまだ隠し持っている財宝のありかを吐かせるための口実を探していた。折しも、ウルアパンのエンコメンデロからタンガショアンとドン・ペドロが貢納を納めさせないように画策していること、スペイン人を殺害して人身供犠に捧げタンガショアンがその人皮を祭祀でまとったこと、改宗後も偶像崇拜を行い、果てはグスマン軍を攻撃する準備をさせていることなどが訴えられていた。

到着当日から拷問が開始される予定だったが、フランシスコ会士の取りなしとツインツツァンでの拷問がもたらす悪影響のために、中断された。罪状を確定するために、原告が指名する証人への尋問と被告タンガショアンの弁護人による反論の裁判手続きが形式的にとられた。しかし、グスマンにとって都合な証言だけが採択され、2月5日に尋問が再開された。タンガショアンが苦しみに耐えかねて無実の罪を認めるまで、拷問が繰り返し行われた。続いてドン・ペドロや君主の娘婿ドン・アロンソ・ウイシエ、通訳と、順次、拷問が行われた。ドン・ペドロが拷問の第2段階の水責めでタンガショアンの偶像崇拜とスペイン人の人皮を自分とともに身にまとったことを認める一方、娘婿と通訳は繰り返される責め苦にもタンガショアンの罪状を認めなかった。ドン・ペドロは物証を求められスペイン人の人皮を持ってこさせようと

したが、偶像だけが届けられた。身分の低い先住民からも証言がとられ、グスマン軍に対する潜伏攻撃の陰謀と獣姦の性向という、すべてタンガショアンに不利な証言が集められた。2月13日、タンガショアンは人身供犠に捧げた先住民の血で塗られた偶像を自分のものだと思われ、14日死刑が宣告された。多くのスペイン人を殺害した裏切り行為と偶像崇拜が理由だった。刑が執行される前に、タンガショアンはツインツァンから呼び寄せたひとりの使者に遺灰を都に持ち帰るよう遺言を残した。処刑後、遺体は茶毘にふされ、遺灰は川に流された。しかし、使者が残された遺灰を集め持ち帰り、遺族に一部始終を報告したのであろう。タンガショアンの遺灰はパツクアロに埋葬された。アステカのように死闘の末、コルテスに降伏したのではなく、戦いを回避して臣従を誓い改宗すら受け入れたことのすべてが、グスマンによって水疱に帰した。

グスマンはドン・ペドロをタンガショアンなき旧王国の司政官に任じた。ドン・ペドロは、スペイン支配が進行していく状況下で、ミチョアカンの最高権力者の地位を不動のものにした一方で、タンガショアンの遺族や亡き君主を支持する貴族の恨みをかわずにいられなかったと考えられる。君主の死からおよそ10年、ドン・ペドロは権力の絶頂にあった。副王アントニオ・デ・メンドサ（在位1535-1550）が、1539年ミチョアカンを巡察した時に、タラスコ王国の調査を命じた。その命によって編纂されたRMにおいて、ドン・ペドロは自らの出自にふれ、王国統治の中樞をなすかつての狩猟民ウアクセチャでも王族ウアナカセの家系でもなく、パツクアロ湖上のハラクアロの島人ウレンデティエチャの中でも、高位の神官一族の出であると述べている。ウレンデティエチャはウアナカセに征服された民だったのである。

2. ウレンデティエチャのドン・ペドロ・クイニエランガリ

RMの表紙には、中央に報告書の編者フランシスコ会士ヘロニモ・デ・アルカラが、右側に報告書が献上される副王アントニオ・デ・メンドサ、左側に西洋の服装をした司政官ドン・ペドロとその背後に先スペイン期の職位を表わすシンボルを携えた神官たちがひかえている図が描かれている。よく見るとドン・ペドロの帽子には魚の飾りが描かれている。このモチーフはミチョアカン（ナワトル語で「魚を支配する者の地」）のメタファーであるだけでなく、ドン・ペドロがパツクアロ湖の漁民の島ハラクアロの人であるメタファーにもなっている。二重のメタファーは、ドン・ペドロのアイデンティティの所在に関わり意味深長である。洗礼名のペドロは漁師で鍵の番人を表わしている。⁽⁷⁾



『ミチョアカン報告書』

タンガショアンは君主の座につくと長老の重臣ティマスの進言を聞き入れ、2人の弟を兄嫁と不義密通を犯した咎で殺害させている。ティマスの名はRMではタンガショアンの兄弟の中にも見られるが、ドン・ペドロは彼が君主の兄弟だとは述べていない。一方、タンガショアンはドン・ペドロと義兄弟の契りを交わし、親族の女性を嫁がせてより強固な関係を築くことでドン・ペドロの忠誠心を確かなものにしようと努めた。婚礼の使者にたてられた神官は君主の想いを伝え、スペイン人到来の危機に直面し、使者の責務を全うできる人物がドン・ペドロにおいてほかにないのだと言い含める。神官の言葉を受けたドン・ペドロは、

はじめわれわれはあなた方の祖先に征服されました。われわれ島の者どもはあなた方の奴隷です。そこで代々の君主への食物や、山で薪を切り出すための斧を担いで持ってまいりました。またお飲みになる水を壺にいれて持ってまいりました。それゆえにこそわれわれは兄弟として扱われました。われわれがあなた方に代って統治者となり、代々の君主から与えられるご命令に耳をかたむけてきたからです。⁽⁸⁾

と述べている。

12世紀末から13世紀初頭にかけて、狩猟採集民ウアクセチャ（タラスコ語で「鷲族」、ナワトル語では「チチメカ」）がパツクアロ湖の北西サカプからミチョアカンに侵入した。彼らが侵入してくる数百年前からすでにタラスコ語を話す人々が定住していた。⁽⁹⁾ その定住者の一部がミチョアカンから北部に移住し数百年後、帰還するまでの間、狩猟採集の生活様式を身につけていたが、言語までは失っていなかった。ミチョアカンに帰還してサカプからナランハンに到ると、ウアクセチャはタラスコ語でナランハンの人々と意志疎通することができた。ウアクセチャはやがて5集団にわかれ、パツクアロ湖周辺地域に侵入した。ウアクセチャの主神クリカウエリを奉じるウアナカセ集団が湖の南パツクアロの付近に到ると、ハラクアロの島民と接触を始め、彼らの文化を取り入れた。パウアクメ2世（1340-1375）とハラクアロの漁師の娘との間に生まれたタリアクリ（1370-1450）は、タラスコ王国の開祖となった。

タリアクリはパツクアロを拠点にウアナカセの勢力拡大を図った。彼の息子イキンガレ（1415-1465）や甥の兄弟イリパン（1405-1470）とタンガショアン（1410-1480）に首長となる心得を説き、湖の島々や周辺部の征服に向かわせた。そして息子にはパツクアロを継承させ、イリパンとタンガショアンをそれぞれイワツィオとツィンツンツァンの首長とした。タリアクリが定めた三首長の協力関係がタラスコ王国成立の地平を切り拓いた。その三首長の協力体制は盤石に見えたが、タリアクリの子イキンガレが亡くなると、イワツィオの首長イリパンは彼の跡継ぎを殺害するに至り、パツクアロのタリアクリの血脈は断絶した。こうして、イリパンのイワツィオが弟のタンガショアンのツィンツンツァンを抑えて強大化する一方、パツクアロは首座を降りた。

タリアクリの死後20年という短期間に生じたタリアクリ一族とイリパンとタンガショアンの

二人の兄弟との覇権争いは激しかった。タンガショアン亡き後、ツイツイパンダクアレ（1440-1479）がツインツツァンの首長になると、イワツイオとパツクアロを圧倒して覇権を樹立し、タラスコ王国の都はツインツツァンと定められた。ツイツイパンダクアレを継承したスアンゲアからタンガショアン・ツインツイチャの治世期にかけてスペイン人が到来し、図らずも権力構図が塗り替えられることになった。

3. 植民政策推進における司政官ドン・ペドロ

RMにおけるドン・ペドロの語りは、ミチョアカンをスペイン人へ平和裡に引き渡すことで、我こそがタラスコ王国とスペインの二つの世界の媒介者として貢献したのだと副王メンドサとスペイン国王に対して訴えていると言われる。⁽¹⁰⁾ 彼の果たした役割はまぎれもなくそうであった。ドン・ペドロは彼が遭遇し経験したことを物語っている。スペイン人に抗戦するのか、それとも宥和策をとるのか、ドン・ペドロの語りでは、タンガショアンが直接判断する言説も場面も最小限に抑えられている。状況描写からタラスコがオリ軍と一戦交える臨戦態勢を整えて兵士を要衝に配備していたことやドン・ペドロの実兄が司令官だったことを窺い知ることができる。一方、タンガショアンが彼に入水自殺を勧めたティマスの殺害をドン・ペドロに命じている場面は、はっきりと語られている。長老ティマス派の判断と行動の詳細を巧みに捨象することで、RMの編纂時にドン・ペドロが己の過去の行動と判断を正当化する意図がなかったとはけっして言うことはできない。一方的な語りとはいえ、史実上、ドン・ペドロは君主の名代としてコルテスにもオリにもいち早く接触してアステカの惨状とスペイン軍の兵力を見きわめて軍を撤退させ、タンガショアンに彼の判断を伝えている。タンガショアンとともにグスマンに翻弄され拷問も受けた人物である。RMの語りと史実を考慮すると、固定観念にあまり縛られることなく事態を判断して行動する現実主義的な人物像が浮び上がる。Stoneの言うように、メキシコでは評価が高くないマリンチェと同じように、ドン・ペドロの評価も一様ではない。⁽¹¹⁾

1531年1月、グスマンが第一次高等法院議長を解任され、次のメンバーが任命された。第二次高等法院によって任命された地方官がミチョアカンに派遣されたが、彼らは財宝のありかを突き止めるために先住民に対する不正の手を緩めることはなかった。1532年8月末、先住民貴族は、亡きタンガショアンの遺児とドン・ペドロの息子を伴いメキシコ市の高等法院に向向き、グスマンの暴政に対する反乱の嫌疑に対して弁明を行った。この年にドン・ペドロがツインツツァンの司政官を務めていたかどうかは不明だが、陳情団がタンガショアンの遺児とともに彼の息子をメキシコ市へ伴ったことは、ドン・ペドロの地位が重要だったことを示している。⁽¹²⁾ この陳情を聴いた高等法院聴訴官バスコ・デ・キロガは、1533年6月から半年をかけてミチョアカンを巡察することになった。

キログの巡察の目的は地方官が隠匿した財宝の調査、役人やエンコメンデロと先住民の関係修復、スペイン人都市建設、ミチョアカンの社会・経済の仕組みや銅生産・加工に関する調査など多岐にわたっていた。これらの調査のために、ドン・ペドロやツインツンツァンの先住民貴族、地方の首長と謁見した。とりわけ、先住民にとって巡察の恩恵は2つあった。ひとつは、適正な貢納額が、合意の印として副王、エンコメンデロ、先住民司政官の三者の署名入りの文書に示されたこと。二つ目は、1528年10月20日付勅令で、旧王国の中心部をなし、征服後も貢納受領権を許されていたパツクアロ湖畔の北岸から西岸に至る地域にエンコミエンダの特権を有していたエンコメンデロのファン・インファンテが、1533年10月から半年間、身柄を拘束されたことである。インファンテが獄中から執事に宛てた書簡では、ドン・ペドロの扱いに配慮し毎日、一定の物資を与えることと、パツクアロ湖北岸に位置し、インファンテのエンコミエンダにその一部が含まれていたラグナ村が奪われるのではないかという懸念を払拭せよと指示していた。1534年4月18日付の執事宛ての書簡において、他のスペイン人エンコメンデロとの関係よりも、キログとの関係のほうがさらに陰悪であると述べている。両者の陰悪な関係は、ドン・ペドロと必ずしも良好な関係にあるとは言えない他の先住民貴族にも、ともに共通の敵インファンテを牽制し、あわよくば彼のエンコミエンダの特権をなかったことにする好機と映った。この点に関しては、経済基盤が損なわれるくらいならどのようなことでも受け入れる共闘態勢ができたのである。彼らは偶像破壊と改宗、服装の西洋化、一夫多妻制の放棄、金製品の供出、スペイン人への貢納を受容した。⁽¹³⁾

巡察中の1533年9月14日、キログはドン・ペドロの支援を得て、病人・貧者・旅人の収容と先住民の改宗・技能教育の目的で、グアヤメオにおける施療院村サンタ・フェ・デ・ラグナの建設計画を立てた。その場所はドン・ペドロがキログに推奨した。ウアクセチャはミチョアカンに進出した時に、サカプから入りこのグアヤメオで5つの集団にわかれてパツクアロ湖周辺に広がっていった。グアヤメオは前述のインファンテのエンコミエンダに一部が含まれていたラグナ村にあたり、ツインツンツァンの領土でもあった。インファンテは施療院建設計画決定の翌月に、身柄を拘束されている。旧王国の中核部にインファンテのエンコミエンダが下賜されたために、領土の一体性と経済に影響を及ぼすことに対する危機感が先住民貴族の間で高まっていた。事態の打開を模索していたドン・ペドロは、キログの理想の実現に協力して施療院村が建設されれば、やがて施療院に国王から特権が認められ、インファンテの野望を阻止できると判断した。ドン・ペドロは、1538年6月21日、キログに用地を150ペソで譲り渡している。両者の協調体制はそれだけにとどまらず、ドン・ペドロの親族ドン・ディエゴが施療院村の司政官を務めたことにも反映されている。⁽¹⁴⁾

キログは巡察中にミチョアカンの先住民貴族と関係を築いたが、その関係は聴訴官としてよりもミチョアカン司教として1538年から亡くなる1565年までの27年間の永きにわたり、ミチョ

アカンの先住民とスペイン人に影響を与えた。キログは、当初から、司教座をタラスコの王都ツインツァンに置くことは念頭になかったようで、候補地パツクアロの視察に先住民の要人やRMの編者となるフランシスコ会士ヘロニモ・デ・アルカラを伴ったと言われているが、あくまで形式的なことにすぎなかった。キログがパツクアロを好んだ理由は湧水がでることだけで、それ以上の根拠を示す史料はない。アルカラが同行した事実もなく、彼自身はツインツァンを司教座とすることを支持していた。ツインツァンの先住民貴族にすれば、彼らの誇りが傷つけられるだけでなく、王国を支えてきたツインツァンとイワツィオ、パツクアロの上下関係が乱されることになった。パツクアロの下位にツインツァンが、その下にイワツィオが位置づけられ、首位のパツクアロの命令に従わねばならないことを意味した。関係が逆転したために、ツインツァンは、パツクアロの大聖堂建設のための賦役を課せられることになった。⁽¹⁵⁾

ドン・ペドロと年齢17歳前後に達していたと推定されるタンガショアンの嫡男ドン・フランシスコは表だって遷都には反対しなかった。一方、弟のドン・アントニオは兄の死後、司政官に就任すると、キログに対する反発を顕わにした。⁽¹⁶⁾ ドン・ペドロは1538年8月の遷都会議に出席しており、9月には遷都問題の質問に対して、キログが指名した証言者として、ツインツァンの先住民は進んでパツクアロに移住していることを知っており、また彼自身、そこに自宅を建設済みだと述べている。⁽¹⁷⁾ 遷都問題が浮上したとき、遷都反対の意を貫いた貴族にツァピカウアなる人物がいたようであるが、Beaumontによれば、その時ツインツァンの司政官を務めていた。⁽¹⁸⁾ しかし、絵図の中のツァピカウアには“don”の敬称が与えられていない。与えられていたとしても、節を曲げなかったことがわざわざして敬称が剥奪された可能性が高い。1539年から司教座都市を支える先住民の移住が徐々に開始された。最終的に、総数3万人もの先住民がパツクアロ、およびその周辺部に移住するよう命じられた。その移住を陣頭指揮したのもドン・ペドロだった。

タンガショアンが処刑されて以来、ドン・ペドロはツインツァンの司政官職を自らの死を迎える1543年まで一貫して務めたと考えられてきた。処刑前年の1529～1530年、1533～1536年、1538年の3か月、1539年初頭の史料からドン・ペドロが司政官だったことが証明されている。史料的に欠落年があるからといって、彼が司政官でなかったとは言えない。先住民が要職に就くには、スペインの上位権力による評価が任命に影響した。アントニオ・デ・メンドサが、1535年、初代副王に就任し、やがて司政官の任命に副王の認可が必要とされるようになるが、制度はすぐさま適用されなかったと考えられる。なぜなら、任命が適切かどうかを判断するには、ミチョアカンの先住民社会の内情とスペイン統治の利害を考慮しなければならないからである。副王が1539年の巡察の際、この地方の先住民のことを知っていたら、あるいは部下の報告を是認するだけであれば、ヘロニモ・デ・アルカラにRMの編纂を命じることはしなかった

だろう。ツァピカウアのような人物がいて、ドン・ペドロが一時的にせよ、司政官でなかった時期があったとしても、スペイン人の権力者から見て、柔軟性と高い統治能力において彼の右にでる者はいなかったのではないか。

それよりも注目すべきことがある。処刑されたタンガショアン・ツィンツイチャの嫡男ドン・フランシスコ・タリアクリはパツクアロ遷都会議が行なわれた時には、すでに17歳に達していた。なぜドン・ペドロが司政官の地位をドン・フランシスコに譲っていなかったのか。ドン・フランシスコは父が降伏する前年の1521年に、弟のドン・アントニオは1530年の父の処刑前にそれぞれ誕生していた。ドン・フランシスコは父が処刑された時には9歳だった。嫡男のドン・フランシスコが地位を継承して司政官を務めるには幼すぎたので、ドン・ペドロが代って司政官を務めたと言われてきた。ドン・フランシスコはドン・ペドロが1543年に死亡して初めて司政官に就任することができた。前年の1542年4月20日付の副王メンドサ宛書簡では、21歳に達していて、それまでに結婚して土地を所有していることが記されている。⁽¹⁹⁾ ドン・ペドロは、すでに既婚者になっていたドン・フランシスコに地位を譲らなかった疑いがある。ドン・フランシスコとドン・アントニオの忠実な後見役としての自覚をもってふるまっていれば、死後、ドン・フランシスコから土地の篡奪の咎で訴えられることはなかったであろう。ドン・フランシスコは司政官職にわずか2年あっただけで、1545年5月18日、疫病に倒れている。享年24歳だった。兄亡き後、14歳か15歳に達していたと思われるドン・アントニオが同年9月、司政官に就任し、1562年まで地位にとどまった。このようなことから、タンガショアンの血脈を受け継ぐ王族ウアナカセとハラクアロのウレンデティエチャの神官家の出自であるドン・ペドロの確執と彼の権力への執着が深かったことを窺い知ることができる。

4. ミチョアカンのナワによる抵抗

タラスコ王国はウアクセチャがミチョアカンから他のエスニック集団を追放して覇権を樹立したのではなく、あとから彼らの支配領域に進出し、婚姻関係や同盟によって勢力を拡大した社会だった。やがてウアクセチャの中のウアナカセ一族に属するツィンツァンの首長権力が強大になって国王権力化した。他のエスニック集団を支配下におくと、ウアクセチャを首長につけて土地を管理させ貢納を求め、臣従と引き換えに特権を与えて貴族に列することで統合支配を図った。その統合支配が強力な社会だと捉えられてきた。しかし、先スペイン期においてさえ必ずしもそうではなく、ましてスペインの支配が介在するようになると、数百年前に遡るエスニック集団の歴史意識が失われていなかったことが明らかとなった。スペインの征服とそれに続く植民地支配の大転換期にあって、集団の存続と利益を保全するための行動が、反ウアクセチャのエスニック集団の貴族によってとられたのである。

ミチョアカンには、パツクアロ湖周辺に農業と漁業を営むドン・ペドロに代表される非狩猟採集のエスニック集団がウアクセチャよりも先に定住していた。RMの中で語られているように、スペインの征服前夜、オリ軍との戦闘兵としてマトラツインカ、オトミ、ウエタマ、クイトラテカス、オクミエチャ、チチメカが挙げられている。⁽²⁰⁾ マトラツインカとオトミは、対アステカ防衛の前線基地にあたるミチョアカン東部とチャローウダメオ地域において、1476年から1477年のアステカのアシヤカトルによる攻撃を退けた。アシヤカトルはその報復として、トルーカ盆地に居住していた彼らと同じエスニック集団の人々に苛政を行なったために、タラスコの保護を求めて避難してきた者がいた。⁽²¹⁾ ナワは、ミチョアカン西部の低地に暮らしていた。先スペイン期、彼らは、12世紀末から13世紀初頭にかけてミチョアカンに入ってきたウアクセチャよりも先にこの地に足を踏み入れていた。⁽²²⁾

王都ツインツツァンは先スペイン期にウチチラ（ナワトル語で「ハチ鳥の場所」）と呼ばれていた。タラスコ語で同じ意味のツインツツァンの呼称のみが用いられるのは、スペイン支配後しばらくしてからのことである。他の重要拠点イワツィオはコヨアカン（ナワトル語で「コヨーテのいる場所」）と称されていた。ウアクセチャは彼らの君主をナワトル語で“cazonci（カゾンシ）”と呼び、タラスコ語の“irecha（イレチャ）”を用いなかった。タラスコ語で同義語があっても使用されなかった理由を説明する定説がない。征服者コルテス軍の情報を伝え同盟を求めるアステカやトラスカラの使者がツインツツァンを訪れるが、使者との意思疎通において、「ナワトラト」と呼ばれたナワトル語の通訳が働いていた。グスマンにタンガシオンとともに拷問にかけられた君主の通訳ファン・デ・オルテガは、ナワだった。

ではなぜミチョアカンにナワの影響が色濃く見られるのか。ひとつにはナワ系アステカの民族移動譚に関わっている。アステカがチコモストックの7つの洞窟のひとつから南に民族移動を始めてミチョアカンに入ると、前進の途中、湖で水浴びする人々がでてきた。前進を命じるウィツイロポチトリの神託に従って移動を続けた人々は、水浴びした人々の脱ぎ捨てた着衣を盗んで裸のまま置き去りにした。置き去りにされた人々は怒りを覚えその怨恨がアステカに対する確執の原因となったと言われる。彼らは裸では前進することもできず、ミチョアカンに残留した。

パツクアロ湖周辺にナワが暮らしていたことは、RMの語りからも窺い知ることができる。湖上の島ハラクアロの首長カリカテンは、ウアクセチャのタリアクリの攻撃を恐れていたため、ツインツツァンを離れタリアランの首長となったナワのスルンバンに援軍を求めた。スルンバンが神官ナカを同じナワのクリングアロの首長チャンソリのもとに遣わした。チャンソリはタリアクリに娘を嫁がせ子供ができるが、タリアクリはこの一族と敵対関係となる。ナカはその任務遂行の途上、シラウエンの首長クアラクリのもとを訪れ、ハラクアロへの援軍を要請した。クアラクリはナカに援軍を確約したかのように信じ込ませてタリアクリと密通し、ナカを

毘にはめた。タリアクリに生け贄にされた神官ナカの人肉はスルンバンのもとに送られ、それとは知らず肉を食したスルンバンは慌てふためいた。その報復として、タリアクリの従兄弟を殺害した。⁽²³⁾

他にミチョアカのナワの存在を示しているのは、1565年の訴訟に提出された「フクタカト絵図」である。フクタカト、別名、ヒカランと言われ、現在のウルアパン市行政区にある。そこに暮らしていたナワが銅や染料の土がとれる土地の本源的所有権を求めて訴訟を起こした。彼らの祖先は、テスカトリポカ神の導きによって資源を求めて、メキシコ湾岸のベラクルスの先からメキシコ西部に移動し、フクタカトに到ったナワであった。その地でテスカトリポカ神に銅の冶金術と瓢箪の容器の絵付けを教えられた。⁽²⁴⁾ タラスコ王国は、パツクアロ湖沼地帯の支配が固まる1440年以後、貴重な産品や資源を求めて西部の低地への侵略段階に入った。この訴訟は、この地域に先住していたフクタカトのナワが、植民地期になり、祖先の代から関わってきた土地が、隣接するウレチョにあとから入ってきたタラスコに奪われることを阻止するために起こされたものだった。

ナワはウチチラーツィンツァンの覇権樹立に貢献したエスニック集団でもあったことが判っている。王国の始祖タリアクリはパツクアロを治め息子を後継者とする一方、ナワのスルンバンの報復で父を殺害され、母親とともに乞食同然の暮らしをしていた2人の甥を探しだし、それぞれにイワツィオとツィンツァンを攻略させ首長の座を認めた。タリアクリの思いに反し、彼の息子と甥との協力関係が続かなかったことは前述した。ツィンツァンの首長となったタンガショアンの子ツィンツァンパングアレは、親族が支配するイワツィオとパツクアロに対して覇者となった君主であった。しかし、その背景には20人のナワ商人の尽力があった。その功績に鑑み、彼らとその子孫が貢納を免除され貴族に列せられたことが、1543年の“La Memoria de Caltzin (「カルツィンの記憶」)”と呼ばれる文書に語られている。ツィンツァンのナワ貴族ドミンゴ・カシミールは、ナワの権利回復のために裁判を起こした。その時、彼が証拠としてもっていた絵文書は紛失した。書記だったカルツィンがその絵文書の概要を記した文書が前述の手記である。

ドン・ドミンゴは、ドン・ペドロとは異なり、キログが推進したパツクアロへの司教座都市遷都に対し強い反対行動に出た。彼がツィンツァンのフランシスコ会修道院に寄贈したオルガンを、フランシスコ会士が司教に贈呈したものと主張してパツクアロに運ぼうとしたことがきっかけだった。それをドン・ドミンゴをリーダーとする武装したナワが阻止した。彼らはフランシスコ会修道院に逃げ込み、司直の手を逃れようとした。そのために、ドン・ドミンゴは、キログによって長期間にわたり破門されることになった。対立した相手はキログだけでなく、亡きタンガショアンの次男ドン・アントニオとも対立した。ドン・アントニオの命に反してグアチチル討伐に出兵せず、彼すら殺害しようと企てた。ドン・ドミンゴは、その罪

に対しスペイン人地方官から数年間に及ぶミチョアカンからの追放刑を宣告された。⁽²⁵⁾ このように、ウ阿克セチャがミチョカンに移動してくるよりも以前にこの地に定住していたナワもウ阿克セチャとの歴史的経緯をけっして忘れることはなく、スペイン支配下においてさえ、先スペイン期の特権や権利の確保に邁進した。ミチョアカンにおけるツインツンツァンの首位性は、司教座遷都のために、パツクアロに移った。前述したように、ツインツンツァンはパツクアロの下位コミュニティに位置づけられ、上位のパツクアロに税を納めなければならない立場に貶められた。そのため、ツインツンツァンに残留した先住民貴族は、1567年、パツクアロの自治行政からの独立性を求める訴訟をおこし、1593年、勝訴に至った。

むすび

エスニック集団の融合が進み高度に組織化された社会と考えられていたタラスコ王国も、スペインの征服とそれに続く植民地初期の激動期に、単一のエスニシティで構成されていない社会の弱点を露呈した。ドン・ペドロは迫りくるスペイン軍の危機に臨むために王国の重臣に登用され、君主の代理としてスペイン人征服者とわたりあい、兵を撤退させて王国をスペインに引き渡した。彼はスペイン支配によるまったく新しい時代への適応力と判断力にひととき優れていたために、旧王国の先住民貴族の中でも抜きん出た実力者として権勢をふるい、タンガショアンの嫡男が司政官に就任するのを故意に阻止したのではないかという疑いも出てきている。死を迎える3年前に副王に献上されたRMにおいて、自らの出自について述べる時、ウ阿克セチャに征服された島人であることを公言して憚らなかつた。ナワも、先スペイン期と植民地期のいずれの時代においても、けっして周縁的エスニック集団ではなかつた。ツインツンツァンのナワ貴族ドン・ドミンゴは、パツクアロへの司教座遷都のために、彼らの祖先が先スペイン期にウ阿克セチャに認めさせた子々孫々に至る免税特権が損なわれる事態に陥ると訴訟を起こすだけでなく、ドン・アントニオの殺害すら企てて集団利益の防衛に出た。フクタカトのナワも祖先の歴史に遡る権利を主張した。彼らはすべて、固有のアイデンティティを堅持するだけでなく、それぞれ、一族やエスニック集団の利害得失を冷静に判断して積極的に行動したのである。

先住民貴族の行動規範は、彼らのエスニシティやそれに関わる利害であり、それを守り発展させてきた祖先の行動、つまり彼らの歴史認識でもある。そのために、スペインの支配するところとなっても、彼らは目前の問題に対応し明日の「生」を確保するために、数百年前の歴史に遡る祖先の来歴に依拠して訴えを起こし正当性を主張した。彼らの思考論理と表現方法が為政者のそれと全く異なり理解されない場合、先住民のエスニシティはないものとされ、均質的、かつ遅れた受動的な存在として扱われることになる。先住民がけっしてそのような存在では

なかったことを、ドン・ペドロやドン・ドミンゴ、そしてフクタカトのナワの行動が示していると言えよう。

注

- (1) Warren (1977) p.51. ミチョアカンから略奪された財宝がコルテス軍に分配された所収史料によれば、司令官13人、騎馬兵25人、弓手20人、歩兵103人の総勢161人が挙げられている。分配に与れなかった者や死傷者は除外されている。一方、『チチメカ神話』(1987: p.280) では、「やがて君主はスペイン人部隊がタヒマロアに到着した報せを受け取った。毎日、使者がやって来て、二百人のスペイン人が進軍していると言った。」と記されている。スペイン軍の規模は200人前後だったと考えられる。Alva Ixtlilxóchitl (1891: p.382) には、当時テスココ領主だったアルバ・イシュトリルシヨチトルがオりに5,000人の兵を提供したと述べている。
- (2) Warren (1977) p.107.
- (3) *Relación de Michoacán* (1989) [以後、RMと略記] p.280, ル・クレジオ (1987) pp.294-295.
RMは、副王安トニオ・デ・メンドサ (在位1535-1550) の命により、フランシスコ会士ヘロニモ・デ・アルカラが1539-1540年に、旧王国の重臣にしてスペイン支配下の司政官に任じられたドン・ペドロとキリスト教の布教により排斥されたパタムティ (大神官) の証言をもとにタラスコ王国について編纂し、副王に献上した報告書である。
ル・クレジオのフランス語版邦訳『チチメカ神話—ミチョアカン報告書—』では、タンガシヨアンはコルテスに対して、「私は侯爵を宗主とっています」と訳されている。ちなみにRMの原文では“Y dijole el cazonci que ansi lo haría, que le había visto y dijole: “Yo vendré a visitarte” . と書かれている。タンガシヨアンがコルテスに謁見したのは1524年の晩夏、コルテスがホンジュラス遠征に出陣する前のことである。この時点では、コルテスは侯爵ではなく、ヌエバ・エスパニャ (メキシコ) の総軍事司令官職と総督職を兼任していたにとどまる。(1522年10月15日の勅令) 侯爵の称号と領地が下賜されたのは、1529年7月6日である。従って「貴顕 (=コルテス=le) にお目にかかりましたので」と解釈されるのではないか。この問題は本稿の目的ではないので、解釈上の問題提起にとどめる。
- (4) Warren (1977) p.437. 所収史料 C. Guzmán a Godoy, 20 de agosto de 1529. (AGI, México, leg. 3177)
- (5) *ibid.*, pp.437-438. 所収史料 [En las espaldas] A mi especial amigo, Antonio de Godoy, mi criado. D. Godoy a Gonzalo López, sin fecha. (AGI, México, leg. 3177, en las espaldas de la carta anterior de Guzmán).
- (6) Escobar Olmedo (1977) p.31.
- (7) Stone (2004) p.157, Afanador-Pujol (2015) pp.21-22.
- (8) ル・クレジオ (1987) pp.240-241. RM (1989) pp.224-225.
- (9) Baracs (2005) p.91.

- (10) Stone (2004) pp.155-156., Afanador-Pujol (2015) pp.5-6. 両者の表現は多少異なるが、征服期から植民地初期におけるドン・ペドロの歴史的立場は変わらない。
- (11) Stone (2004) pp.160-161. Stoneは彼が再評価に値すると述べ、コルテスの通訳となってアステカの征服に貢献したマリンチェが周期的に見直され読み解かれるのと同じように、ドン・ペドロの評価も時代により変化する複雑さを孕んでいると指摘している。
- (12) Baracs (2005) pp.212-216.
- (13) *ibid.*, pp.219-221.
- (14) *ibid.*, p.223.
- (15) *ibid.*, p.352. 1556年、ツィンツァンの先住民貴族はパツクアロの大聖堂建設計画に起因する苛斂徴求を不服として、キロガとドン・アントニオを訴えた。原告の貴族の中に、ドン・ペドロの子供ドン・バルトロメがいた。
- (16) *ibid.*, p.254.
- (17) Warren (1977) p.453. 所収史料 X. Información de Don Vasco de Quiroga sobre el asiento de su iglesia catedral, 1538. (sacado de Don Vasco de Quiroga... con los vecinos del pueblo de Guyangareo sobre que conserve su título de Guyangareo, 1567. AGI, Justicia, leg.173, no.1, ramo 2)
- (18) Beaumont (1778) Tomo II, p.404.
遷都に関連した絵図 (1932年版TomoIIIに所収) には、キロガやアルカラ修道士、ドン・ペドロを始めとするツィンツァンの先住民貴族、および亡きタンガシヨアンの2人の遺児が描かれている。司政官の地位を表す権杖を携えたツァピカウアは、絵図の上部と中央部左端の2か所に描かれている。身なりも貴族のそれであり、絵図上部のツァピカウアはドン・ペドロよりも大きく描かれている。ただそのような絵図にあって、われわれの目を引くのは、描かれている先住民貴族にはすべて“don”の敬称が記されているのに対し、ツァピカウアには記されていないことである。
- (19) Aguilar González y Afanador-Pujol (2018) p.34.
- (20) ル・クレジオ (1987) p.281. RM(1989) p.266.
- (21) Perlstein (2003) p.58.
- (22) ナワは現在でもミチョアカン西部の沿岸・山岳部に集中している。ミチョアカン州における主要先住民言語話者人口132,982人 (INEGI統計、2010年) を見ると、プレベチャ語 (=タラスコ語) 話者117,221人 (88.2%)、ナワトル語話者9,170人 (6.9%)、マサウア語話者5,431人 (4.1%)、ミステカ系諸言語話者1,160人 (0.9%)、その他からなり、ミチョアカン州総人口約430万人 (2010年) の3.5%を占めている。先スペイン期のエスニック集団が減少・変質しつつも、言語を継承している。
<http://cuentame.inegi.org.mx/monografias/informacion/mich/poblacion/diversidad.aspx?tema=me&e=16>
(2020/10/17アクセス)
- (23) ル・クレジオ (1987) pp. 98-114. RM (1989) pp.71-90.
- (24) Roskamp (2010) pp.77-78.
- (25) Monzón, Roskamp y Warren (2009) pp.41-42. イワツィオの貴族が1556年に、ツィンツァンが支

配していた23村のうち5村にはナワトル語を話す人々が暮らしていると述べている。

参考文献

- Afanador-Pujol, Angélica Jimena (2015)
The Relación de Michoacán(1539-1541) & the Politics of Representation in Colonial Mexico, Austin, University of Texas Press.
- Aguilar González, J.Ricardo y Afanador-Pujol, Angélica Jimena (2018)
Don Antonio Huitzmengari: Información y vida de un noble indígena en la Nueva España del siglo XVI, Morelia, Universidad de Michoacán de San Nicolás de Hidalgo y Universidad Autónoma de México.
- Alva Ixtlilxóchitl, Fernando (1891) Publicadas y anotadas por Alfredo Chavero
Obras históricas de Don Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, tomo 1, México, Oficina Tip. De la Secretaría de Fomento.
- Baracs, Rodrigo Martínez (2005)
Convivencia y utopía: El gobierno indio y español de la ciudad de Michoacán, 1521-1580, México, FCE.
- Beaumont, fray Pablo de la Purísima Concepción, OFM (1778), introducción de Rafael López
Crónica de Michoacán, AGN, México, 1932, reed. Con índices onomástico y toponímico, Morelia, Balsal, 1985-1987, 3 tomos.
- Escobar Olmedo, Armando M. (1977) , introducción, versión paleográfica y notas de
Proceso de tormento y muerte del Cazonzi, último Gran Señor de los tarascos por Nuño de Guzmán, 1530, Morelia, Fuente de Afirmación Hispanista, A.C.
- Florescano, Enrique, coordinado por (1989)
Historia General de Michoacán, vol.II, La Colonia, Morelia, Gobierno del Estado de Michoacán e Instituto Michoacano de Cultura.
- Monzón, Cristina, Roskamp, Hans y Warren, J. Benedict (2009)
“La Memoria de Don Melchor Caltzín (1543): Historia y Legitimación en Tzintzunzan, Michoacán”, EHN, 40, enero-junio.
- Perlstein, Hellen Pollard (2003)
“El Gobierno del Estado Tarasco Prehispánico”, Paredes Martínez, Carlos y Terán, Marta, *Autoridad y gobierno indígena en Michoacán*, vol.I, Zomora, CIESA, INAH y Universidad Michoacana de San Nicolás de Hidalgo.
- *Relación de Michoacán* (1989) historia 16, Madrid, Edición de Leoncio Cabrero.

—Roskamp, Hans (2010)

“Los nahuas de Tzintzuntzan-Huitzitzilan, Michoacán: historia, mito y legitimación de un señorío prehispánico”, *Journal de la société des américanistes*, 96-1, tome 96, n.1.

—Stone, Cynthia L. (2004)

In Place of Gods and Kings : Authorship and identity in the Relación de Michoacán, Norman, University of Oklahoma Press.

—Warren, Benedict (1977) Traducido por Agustín García Alcaraz.

La Conquista de Michoacán 1521-1530, Morelia, Fimax Publicitas.

—ル・クレジオ原訳・序 望月芳郎訳 (1987)

『チチメカ神話—ミチョアカン報告書—』新潮社版

(はやし・みちよ 外国語学部教授)